

文 献 紹 介
パール・ヤールダーニ編
「ハンガリー民謡の型 I. II.」

Einführung in die
“Magyar Népdaltípusok (Ungarische Volksliedtypen) I. II.”
herausgegeben
von
PÁL JÁRDÁNYI

依 藤 里 子
下 村 敏 子

序

リストのハンガリーラプソディーやブラームスのハンガリーダンスにおいて広く用いられた民族調のメロディーは、今日広くハンガリー風のメロディーとして受容聴取されている。リスト研究におけるこの領域では Zoltán Gárdonyi 著の「Liszt Ferenc Magyar Stílusa (フランツ・リストのハンガリー様式)」(1936 Budapest) が今日でもなお、代表的研究としての確固たる位置を占めており、これについては本論では立ち入る余地はないが、ここでははじめに一例として、ブラームスの歌曲〈Immer leiser wird mein Schlummer (いつもそっと静かに私のまどろみが忍び寄る)〉がそのインスピレーションを得たと思われる譜例を挙げておきたい。



Es-te ván māt, ké-ső es-te, Pász-tor-tü-zek ég-nek mesz-sze,
Mesz-sze, mesz-sze, más ha-tá-ron, Az al-föl-de ró-na-sá-gon.

訳：今は晩、だんだん夜はふけ
遠くに羊飼いの火が燃えている。

遠く、はるか遠く、異教徒たちが
住むはらかな平原の隣り村に。

とりわけ19世紀西洋音楽史における民族語法の爆発という潮流の中で広く知られるようになった数々のハンガリー風の旋律の流布に伴い、一方ではこうしたポピュラーな旋律が本来のハンガリー音楽に根ざしたものなのかどうかという考察が展開されることになる。この考察の糸口を切ることになったのは、Bela Bartók や Zoltán Kodály が古来からの真正のハンガリー音楽を集大成した功績であろう。即ち、Bartók による「A Magyar népdal (ハンガリー民謡)」(1924) や、Kodály による「A Magyar népzene (ハンガリー民族音楽)」(1937) といった業績にである。

1782年に Miklós Révais がハンガリーの民族詩と歌曲の収集を関連づけ、続く István Sándor も1801年にこれに習ったのを先駆として、こうした研究領域が啓発されてきたのであるが、現在もその最前線に位置づけられる唯一の聖典的文献として、本論において、ハンガリー国立科学アカデミー音楽学研究所編、1964年 Akadémiai Kiadó, Budapest 出版の全3巻より成る「Magyar Nepdaltípusok (ハンガリー民謡の型) I・II. Pál Járdányi 編」、「Népies Dalok (民族的歌曲): György Kerényi 編」のうち、前I、II巻を紹介する次第である。

第I、II、巻について

第I、II巻に収められた旋律は、一世紀にも渡る研究を経て明るみに出たものである。ここに厳選された民謡収集の役割は、ハンガリー民謡の重要な典型についての概観を呈すると共に、これら349曲が真正のハンガリー民族音楽の像を築き上げることにある。それは、この文献に体系づけられた譜例が物語ることだが、理論や記述を通してというのではなく、単に歌の習得を通してという意味である。

これらの収集の中には、子供の歌・宗教的な歌、嘆きの歌、等々、内容的には多様なものが見られるが、旋律学的には総じてハンガリー民謡の典型を示している。厳密に言えば、総じて伴奏という和弦的機能からは自由に放たれているが、和声変化の兆しはみられるという歌われたハンガリーの旋律型なのである。なお、19世紀に広まった民族的芸術歌曲は第III巻に収められているが、和声機能を担う都心の音楽と和声機能を担わない民族音楽の中心地との合間において、莫大な量の旋律分析を試みた後、これら多くの民族的歌曲が、構成・リズム・旋律の曲がりぐあいといった点で、共通の民族的要素をそなえていることが明らかにされている。即ち至るところに、とりわけ旋律線のしめくくり部分に和声が見られているという多くの局面が指摘され、さらに和声にはドミナントトニカ関係の明らかな兆しが見られると指摘されている。しかしこうした旋律群については、都市の芸術音楽の中に深く浸透していったという意味で、

民族音楽史上に大切に顧慮されるべきであるが、この収集には限りがあって載せられていない。ここに載せられた各々の譜例は、単に民謡の批判基準となる試金石としての価値をもつだけにとどまっている。

ここでは旋律型の収集の日時・場所の記録は避けられ、旋律型の古さや由来を問うことも無意味であるということから避けられている。というのは、第一に多くの旋律型の古さや由来は今日に至るまで明らかにされていないということの他に、その歌がどこから、いつ生まれたのかということは重要でなく、それに反して重要視されなければならない点は、その歌がどのようなものなのか、そしてその歌は伝統的な旋律にいかにして合わせられるか、の二つであるという学的着眼に基盤を置いているためである。

この収集の中には、例えばこのようなものが含まれている。

○古い西ヨーロッパのヴォルタメロディー

(I 巻・S. 114 より譜例)

El-mént a két lány vi-rá-got széd-ni, El-in-du-lá-nak, kez-dé-nek mën-ni
Égy-gyik a más-tól kez-dé kér-déz-ni: -Vol-tak-é, mät-ka, té-göd ké-ret-ni?

訳：二人の少女が花を摘みに出かけた。

彼女たちはどンドン歩み入り、

その一人の少女がもう一人の少女に尋ね始めた。

「あなたには求婚者はいるの？」と。

○ウクライナ・ロシア由来のモール＝ペンタコード＝タイプ

(I 巻 S. 165 より譜例)

Mért jöt-te-ték, vi-dé-ki-ek, Mért jök-te-ték, vi-dé-ki-ek,
Mi-kor nek-ték kat-do-tok nin-csen, Mi-kor nek-ték kat-do-tok nin-csen?

訳：なぜ君たちは、

田舎の民衆のところまで、

はるばるやって来たのか？
軍刀も持たないで。

○ポーランドのマズルカのリズムに基づいた旋律
(II巻 S. 51 より譜例)



Ti-sza part-ján el-a-lud-tam, Jaj de szo-mo-rüt ál-mod-tam:
Még-ól-mod-tam azt az egy-gyet, Ró-zsám, el-ma-rá-dok tő-led.

訳：私はティサ川のほとりで眠り込んでしまい、
ああ、なんと悲しい夢をみたことか！
夢の中で、私はきみのための小さいバラの花を置き去りにしてしまったのだよ。

この収集における旋律型の整理の仕方は、むずかしい辞書的な原理に基づくものではなく、音節数をかぞえることとカデンツに着眼したことによっている。こうして行った分類は、〈カデンツ—索引〉と〈音節—索引〉それぞれに記されている。

○I巻、S. 161 より一例を引用する。



zöld er-dő-ben, zöld me-ző-ben,
zöld er-dő-ben, zöld me-ző-ben La-kik égy ma-dár.

訳：緑の森に、
緑の野原に、
緑の森に、緑の野原に、
かわいい小鳥が住んでいる。

例えば上記の譜例は、〈カデンツ—索引〉において〔5 5 1〕、〈音節数—索引〉において〔4、4、8、5〕と分析表示されている。このように明確で簡単な表示法において、多くの旋律が秩序の列の中に配置可能となっているのである。

また、考察の主な拠りどころとする旋律の秩序は、音楽学者による理解のためだけという表示の仕方ではなく、楽譜を読める人になら誰に対しても一目瞭然にしてわかるような、ハンガリー民族音楽の一覧表によって表示されている。旋律型の配列の仕方は、旋律線の方向と旋律群の高さとの兼ね合いといった音楽上の特性に応じた結果によっている。ハンガリーの民族音楽学研究の多年にわたる資料分類の試みの中で、この収集に明示された配列が、類縁の旋律群を関連づけるために最も有益な方法を提供したと証されている。この意味において、この収集はハンガリー民族音楽の旋律型の収集を代表するものとして、その先駆的な文献的価値をも担っているのである。

以上に述べた図表について、その概略を記せば次のとおりである。

I. 開始部が終結部より高いもの	
A) 高音域で開始するもの	13-143
1. 旋律の前置が例外なく高い	13-112
a) 最初の音列の終わりが上る。	13-54
b 10まで	13-14
9まで	15-20
8まで	21-41
b 7まで	42-54
b) 最初の音列の終わりが下る。	55-112
b 7まで	55-74
5まで	76-109
4まで	110-112
2. 旋律の前置の終わりが下がる。	113-143
a) 旋律の前置の終わりが㊶	113-118
開始音列の終結 4	113-114
" 5	116
" 6	117
" 8	118
b) 旋律の前置の終わりが㊶もしくは㊷	119-143
開始音列の終結 8	119
" b 7	120
" 5	121-134
" 4	135-143
B) 高音域や低音域で開始するもの	144-157
C) 中間音域や低音域で開始するもの	158-216
1. 2つめの音列が最初の音列と同じ高さにあるか、もしくは低くなっているもの	158-177
a) 第1・2音列が同じ	158-167
b) 第1・2音列が異なる	168-177
2. 2つめの音列が最初の音列より高くなっているもの	178-216
a) 第4音から第b 7音まで、上行したり停滞したりするもの	178-209
根音を基にアーチ形を描く開始音列	178-183

文献紹介 パール・ヤールダーニ編「ハンガリー民謡の型 I. II.」

根音を基に波形に流れるような開始音列	184-189
中間部にゆとりをもち、波形に流れるような開始音列	190-195
4度や5度で停滞する開始音列	196-200
ドレミで始まる開始音列	201-207
高音で跳びはねる余地を含んだ開始音列	208-209
b) 根音まで下降する開始音列	210-216

II. 開始部と終結部が等しいもの

A) 2つめの音列が最初の音列より高いもの	7-136
1. 開始音列が小さな終止音を含む	7-72
a) 沈んでいく開始音列	7-21
交替した音での終結	7-10
すべり込む下降	11
小さなアーチを描き波うつ下降	12-21
b) 波うつ部分の後、沈んでいく開始音列	22-46
谷の深い部分が開始部とかけはなれているもの	22-32
谷の深い部分が開始部に近似しているもの	23-46
c) アーチ形を描く開始音列	47-72
先の鋭い谷をもつもの	47-58
意義ある谷をもたないもの	59-72
2. 大きな終止音をもつ開始音列	73-136
a) アーチ形の開始音列	73-95
低音から始まるもの	73-79
中間音から始まるもの	80-95
b) 沈んでいく開始音列	96-136
中間部に波をもち波うつ谷が深い	96-105
中間部に波をもち、波の谷がb 3新しくあらわれる頂点が5	106-118
中間部に波をもち、波の谷がb 3-5、新しくあらわれる頂点がb 6-b 7	119-126
音列の始まりが波うち、波の谷が5、新しくあらわれる頂点がb 7-8	127-130
音列の始まりが波うち、波の谷が6-b 7、新しくあらわれる頂点が8	131-132
意味のない波形	133-136
B) 2つめの音列が最初の音列と同一のもの	137-169
a) 波うつような様子で沈んでいく開始音列	137-151
b) アーチ形を描く開始音列	152-169
中間音域から始まるもの	152-156
低音で始まり、弓形を描いて帰還する形のもの	157-159
低音で始まり、先端に向かって引かれていく音形をもつもの	160-169

続いて、図表理解のための譜例を示す

I. A 1. a

Du - na - par - ton van egy ma - lom,
 Bú - bá - na - tot ór' - nek a - zon, e - je - ho.
 Né - kém is van bú - bá - na - tom,
 O - da - vi - szém, lé - já - ra - tom, e - je - ha!

訳：ドナウ川に水車小屋がたっている。水車では苦惱が打ち碎かれるという。エーイエーハ私にもひとつの苦惱があるのだ。

私はこの苦惱を水車まで運んでいって水車に打ち砕いてもらいたい。エーイエーハ！

I. A. 2. a

A - mer - re én já - rok, még a fák is sír - nak,
 Gyén - ge á - ga - i - ról zöld le - ve - lek hull - nak.
 Hull - ja - tok, le - ve - lek, rejt - se - tük el en - gém,
 Mert az én é - dő - sem más sze - ret, nem en - gém!

訳：私がはるばるやって来たところでは、木も泣いている。

ゆらゆらとゆれている枝から、緑の葉が落ちる。次から次へと葉が落ちてきて私をおおい隠すのだ。なぜなら私の最愛の人は、私ではなくて誰か他の人を愛しているのだから。

I. B.

Szép a ta-vasz, de szébb a nyár, De szép, a-ki pár-ja-val jár.
Jaj de szép a pá-ro-su - lás, A-ki el-ta- lál-ja egy-mást!

訳：春は美しい。夏はさらに美しい。

ああ、二人で歩むのはなんと美しいことだろう。

ああ、二人で幸せを見つけたなら、二人で歩む人生はなんと美しいことだろう。

I. C. 2. b

Ha be-mé-gyék a csár-da-ba, Lè-ü - lök a ló-cá-ra,
Azt kér-di a szép csár-das-né: -Sör kell-é vagy pá-lin-ka?

訳：私はチャールダ（居酒屋）に行くと、ベンチの上に腰かける。

その時、美しい居酒屋の婦人が私に

「ビールにしましょうか。それともブランデー？」と声をかけるのだ。

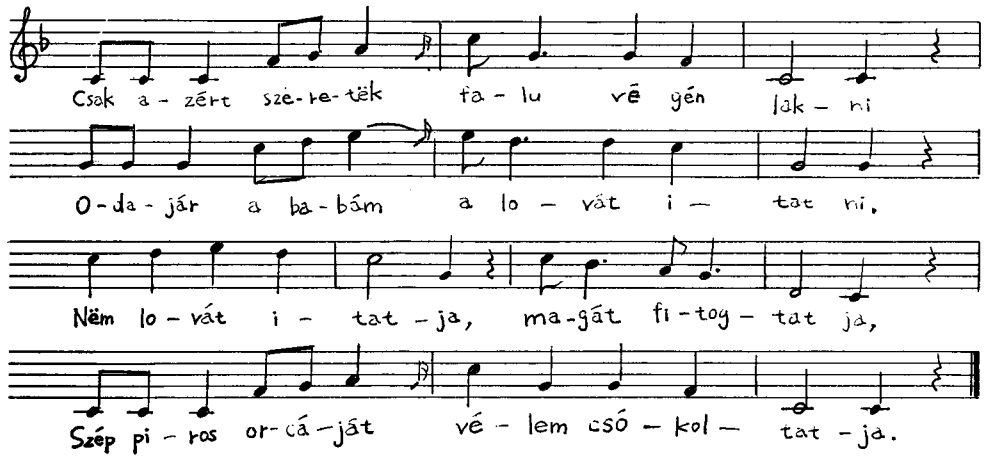
II. A. 1. a

Most jó-vök Gyula - s - ról, Gyula - fe-hér - vát-ról,
Lè-e - sétt a patkó a lo-vam-nak A há - rom lã - bá - ról.

訳：ようやく私はギュラフェヒエールヴァールの町から帰ってきたばかりなのだ。

長旅のせいで、私の馬は蹄鉄を失ったのだが。

II. A. 2. a



Csak a - zért szé - te - ték ta - lu vé - gén lak - ni
 O - da - jár a ba - bám a lo - vát i - tat ni,
 Ném lo - vát i - tat - ja, ma - gát fi - toy - tat ja,
 Szép pi - ros or - cá - ját vé - lem csó - kol - tat - ja.

訳：私は村のはずれに住んでいる、私の愛する人が自分の馬に水を飲ませるために訪れるのだから。でも本当は彼は私に馬を見せるためにやってくる。彼は私のおにキスをする。

II. B. a



Csu - haj nēm kán - nam, ha hol - nap lén - ne va - sár - nap,
 Csu - haj, hogy mēg - lát - nām bús szé - mét a ba - bām - nak,
 Nē síj, hē fíjj, nē bú - sítsd az ár - va szí - ve - niet,
 Úgy - is é - lég - gé fáj, hogy a ti - ed nēm lē - het!

訳：ヨッホヘイ！明日が日曜日ならいいのに。ヨッホヘイ！ そうしたら、私は愛する君の悲しそうな瞳を見ることもないのだけれど。泣くのはおやめ。私の孤独な心を濁らせないでくれたまえ。君に代わることはできないのだから。

旋律線については、開始部と終結部とではどちらの方が高いか、あるいは同一かということ で分類され、特徴づけられている。ここで取り扱っている全3巻より成るハンガリー民謡集の

中には、低く沈んだ音域で始まっている曲は一つもないが、ここに収集された民謡は、上記の図表からも察せられることだが、旋律線の見地から二つのカテゴリーに分類されているわけである。即ち、開始音列が終結音列より高音域であるものが第1巻に収められ、開始音列が終結音列と同じ音高のものが第II巻に収められているのである。しかしこれら2つのカテゴリーは厳密に区別されるものではない。隣り合ったグループ同士は親類関係にあり、これらのカテゴリー、グループ、下位グループ、そして種々の区分はむしろある秩序を示しているだけである。例えば、カテゴリーIとは、高音で始まり低音で終結するものであり、その開始部は終結部よりも高くないものを総括しているのだが、この観点からしてもグループIB（高音域や低音域で開始するもの144—157）は、本質的には既にカテゴリーIIの旋律群に属しているといえる。

しかし、この2つのカテゴリーは、次に挙げる特徴でもってより明らかに区別されている。

I 終結部は確かに開始部と同じ平面を動いている。それらはあちこちで追い抜きを見せるが、しかしその場合には、終結への転換部（Schlußwendung）において迅速に基本音に到達している。

旋律線の個性は、開始部の音型によりもむしろ終結部の音型によって著しく形成されてくるので、確かに最終的には「開始部は終結部よりも高音に位置する」と主張できるのである。

II カテゴリーIIに属する旋律はすべて帰還的形式によっている。

終結部は開始部と同じ高さというだけでなく、その内容も同じである。

上述の観点から見ると、I. C. 2. b. (210—216) は両者のカテゴリー間の橋渡しとなっている。

図表からも考察できるように、この収集における旋律分類法とは、どの旋律群、どの旋律型でも、そして特徴ある形式から本質的に異なった他のタイプのものまでも、その分類表の中に組み入れるという法則に従ったものである。その場合に、異本の多くあるものほどそのタイプの分類は容易であるのに対し、異本が少なく希少なもののほど、それが例外的、偶然的に生じた異本でないかどうかと、また他のタイプを扱っているのではないかどうかと入念に調査しなければならなかったことも指摘し、この点については、主観的な判断によらなければならなかったことはやむを得ないが、それでも記載根拠の決定は多くの専門家の意見を顧慮することによって、そうした主観的判断にまつわる危険は軽減されたとしている。この2巻から成る民謡集はハンガリー国立科学アカデミーのメンバーによる共同制作であり、とりわけ Zoltán Kodály から多くの助言を得たものであると述べられている。また、ある旋律群の最良の異本をきわだたせるために、多くの旋律のうちからその旋律群を代表するのに最もふさわしい典型を選び出すこと、これがこの収集の編集課程における主な課題であったとも述べられている。